

# 礼拝奉仕の心と実際



司祭 ヨハネ 井田 泉

2015年6月14日  
奈良基督教会

## 1. 聖餐式——神が用意してくださる<sup>うたげ</sup>宴

「万軍の主はこの山で祝宴を開きすべての民に良い肉と古い酒を供される。それは脂肪に富む良い肉とえり抜きの酒。」

その日には、人は言う。見よ、この方こそわたしたちの神。わたしたちは待ち望んでいた。この方がわたしたちを救ってください。この方こそわたしたちが待ち望んでいた主。その救いを祝って喜び躍ろう。

主の御手はこの山の上にとどまる。」 イザヤ書 25:6-10

- ・主の御手がわたしたちを招き、もてなし、祝福をもって送り出してください。

## 2. 礼拝への招きと応答

「【都に上る歌。ダビデの詩。】主の家に行こう、と人々が言ったとき、わたしはうれしかった。」

わたしは言おう、わたしの兄弟、友のために。『あなたのうちに平和があるように。』」詩編 122:1,8

- ・招かれたのであるから祭壇に向かって近づいて座る。

## 3. 祈りと静けさ、命の光の世界へ

「しかし、主はその聖なる神殿におられる。全地よ、御前に沈黙せよ。」ハバクク書 2:20

(「主は聖なる宮にまします。全地、その御前に黙すべし」文語祈禱書)

- ・神が語ってくださるために、神の声が聞こえるように、わたしたちは沈黙する。

♪ わたしは静かに神を待つ（カトリック典礼聖歌 184）

#### 4. 礼拝前の奉仕

司式者・説教者／奏楽／祭壇（オルター）

フロントル等 祭色／教会暦と聖歌番号／週報等印刷

生花（神の創造の美をあらわす）／掃除……

- ・奉仕は神さまのわざに加わること。それをとおして恵みを受け、信徒として成長する。

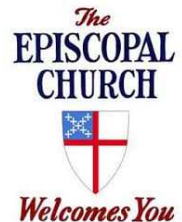
神に愛されつつ行うものなので、臆さない。謙遜かつ堂々で行う。

#### 5. 案内（アッシャー）

“usher” 教会・劇場等の案内係 元の意味は doorkeeper  
礼拝に来た人を迎え入れ（歓迎）、安心して礼拝に参加できるように援助する働き。

「あなたの庭で過ごす一日は千日にまさる恵みです。主に逆らう者の天幕で長らえるよりは、わたしの神の家の門口に立っているのを選びます。」詩編 84:11

- ・神の家の門口に立ち、神を思いつつ、人々を迎える。
- ・“usher” は”The Episcopal Handbook”2008（聖公会ハンドブック）に出てくる。  
 いたるところにあるアメリカ聖公会の表示 →  
 「聖公会はあなたを歓迎します」
- ・これを最初に実現、体現するのがアッシャー



◎「アッシャーの祈り」をする。

- ・式文・聖書・聖歌・週報などをわたす。
- ・慣れない人への適切な配慮（過剰にならない範囲で）。だれかにそばについてもらう。
- ・礼拝前の案内／礼拝中の援助／礼拝後の報告
  
- ・アッシャー自身が礼拝する意識をはっきり持っていることが大切。説教中に作業をしない。座って聞く。  
懺悔・赦罪（執り成し）、派遣の祝福のとき（司祭が会衆に対して十字を切るとき）は特に赦し・祝福を大切に受ける。
- ・礼拝中に来られた方をそっと礼拝空間に案内する。
- ・司式者（説教者）とアッシャーで会衆を囲んでいる（包んでいる）イメージ。
- ・礼拝後のアナウンスはなるべく中央寄りの場所（説教壇付近）で。
- ・礼拝後、テーブルに「週報」「教会案内」「礼拝堂の説明」を置く。

## 6. サーバー

- ・（準備）礼拝のために自分自身が落ち着いた祈りの気持ちを持ち、礼拝の前に静かな空間が用意されるように配慮する。
- ・当日の礼拝当番、聖器その他の備品、マイク、聖歌番号や主日名等の表示などをチェックする。
- ・サーバーは司式者と会衆（また特に各役割担当者）とつなぐ。必要に応じて伝達、連絡する。
- ・**点鐘** 定刻に鐘を打つ。原則  $3 \times 3 = 9$  回、または 12 回。（父と子と聖霊の三位一体の象徴）。この鐘は会衆を祈りへの招くためのものなので、祈りをもって打つ（打った後の響きをよく聞くと

よい)。叩きつけない。人を早く集める必要があるときなどは、合図の意味で大きめに打つ。

- ・ **点火** 中央で一礼して後、右、左の順。十字架の前を横切るときは軽く一礼。複数のろうそくがある場合は、中央から右へ扇を開き、次に中央から左へ扇を開くという順序で。消火はその反対の順で（扇を閉じる形）。

点火に際しては会衆におしりを向けず、右は右手から横へ（斜めでよい）、左は左手から横へ点火器を伸ばして点火する。これは見ばえがよい（所作が自然で美しい）＝会衆が視覚的に祈りの気持ちになることを助ける。

- ・ **入堂**に際してはまっすぐに十字架を意識し、イエスさまに近づく思いで進む。背を伸ばしてしっかりと前進する。わたしたちを招いておられるイエスさまに近づくのであるから、硬直したりせず、気持ちも体も柔らかく。
- ・ **（司式者団入堂）** サーバー、日課朗読者（旧約、使徒書）、執事、司祭の順に入る。横一列で礼をするときは、司式者が中央。サーバーは複数のときは両端。
- ・ **十字架を先頭にしてプロセッション（行列）**するのは、主イエスに従って歩むことを象徴的にあらわすもの。

## 7. オールター

- ・ 聖餐の準備をする大切な役目。目に見える聖器（チャリス・パテン）等の準備とともに、目に見えない心遣いが礼拝を豊かな深まりへと導く。

- ・パンとぶどう酒だけでなく、コーポラル（聖卓に広げる白い布）を広げ、また折りたたむことの中に、司式司祭はキリストの尊い体を意識する。
- ・用意されたものが感謝聖別でどのように用いられるかを見つめる。

## 8. 奏楽

- ・音楽は祈りを深め、清め、ひとつにし、また躍動させるためのもの。
- ・奏楽をとおして祈り、心で歌う。
- ・聖歌・チャントの言葉を大切に。
- ・司式者との緊密な連絡、協力を大事に。
- ・ミスをしてマイナスの気持ちを引きずらない。礼拝を進めていくことが大切。
- ・奏楽者として成長していく。

## 9. 聖書朗読

- ・旧約聖書・使徒書 神からのメッセージを伝える役。
- ・あらかじめよく読み、リハーサルをしておく。意味の把握、発声、間、気持などを大切に。
- ・自分自身がそれを聞いて心に受けとめる。
- ・はっきりと会衆に届ける。会衆は文字を見ないですむくらいに。
- ・聖書の朗読を行うことによって、自分自身がみ言葉との深い関係を持つようにされていく。
- ・福音書朗読はイエスさまご自身の言葉と業に触れる時なので立って聴く。

## 10. 代禱

- ・ニケヤ信経後、間を置かずに速やかに出て、最初の呼びかけの言葉を言う。
- ・位置は前のほうが望ましい。あるいは中央くらいに。
- ・教会と世界の現実の中から祈りを集め、それを携えて神に届ける役。現実（困難、心配、願い……）を神の前に広げる（ヒゼキヤの祈り。列王記下 19:14 - 15）。主イエスの祭司職に加わる恵み。
- ・ひとつひとつ丁寧に、心をこめ、声をはっきり出す。項目を挙げるときも祈る気持ちで。

## 11. 奉献

- ・ 献金
- ・ 聖品（パンとぶどう酒）——私たちの生活・営みとその実りをささげる
- ・ 会衆からの献げ物を集め携えて、みんなの思いを背に受け支えられて神の前に出て届ける。
- ・ 献金を献げる人は、聖歌の最終節が始まるころに前に行く。
- ・ 司祭の奉献の祈りが終わるまで（神に届け終わるまで）、前・中央に立っている。

## 12. 聖歌と聖歌隊

「詩編と賛歌と霊的な歌によって語り合い、主に向かって心からほめ歌いなさい。」エフェソ 5:19

み言葉への奉仕　言葉とイメージを大切に  
祈りの歌声であること。調和。

### 13. 会衆

- ・現在の祈祷書（1990）は特に**会衆の参加を重視**している。自覚的、意識的に礼拝に「参加する」。  
（しかし元気がないとき、疲れのひどいときは、楽にして流れに身をまかせていてもよい。主なる神と礼拝共同体によって、弱った人は支えられる。このことも典礼的礼拝の良さ。）
- ・あらかじめ特祷と聖書日課を読んでおくことが望ましい。  
『特祷・聖餐式聖書日課』A～C年購入を推奨。
- ・礼拝の最初の聖歌の最初の言葉、第1節を確かめる。  
（例・195 ♪鳩のようにくだる み恵みの聖霊よ——今日は聖霊を祈り求める祈りをもって礼拝を始めるのだ！）
- ・唱和 アーメンをはっきり心をこめて。
  
- ・礼拝の最後の祝福の後、速やかに立ち上がり、顔を上げる。  
**派遣の唱和**は、司式者と会衆の呼びかけ・応答の絶頂。

### 14. 司式者

自分自身が祈り、皆の祈りを集め導く。

#### 【結び】

- 各役割と会衆、司式者が協力、協働することの中に、イエス・キリストが臨在される。個人プレーではない。お互いに感謝し、励まし合うようしたい。
- 聖餐式全体を通して、わたしたちは主の食卓を味わい、霊的な養いを受け、信仰を強められ、宣教へと派遣される。